

## 普通展示 陶芸2

展示室8

### 華やぎのかたち

#### —染野夫妻コレクション—

展示期間 平成30年(2018)1月2日(火)～5月27日(日)



荒川豊藏 《桔梗乃絵錦皿》 1957年  
当館蔵(染野義信氏・啓子氏御遺族寄贈)



藤本能道 《色絵花童兒水指》 1973年頃  
当館蔵(染野義信氏・啓子氏御遺族寄贈)

#### 次回の普通展示(陶芸2)のご案内

[展示室8]

### 現代の茶陶 —松下寛コレクション—

平成30年6月5日(火)～9月9日(日)



山口県立萩美術館・浦上記念館  
HAGI URAMAMI MUSEUM

T758-0074 山口県萩市平安古町586-1 TEL0838-24-2400 FAX0838-24-2401

近現代の陶芸において、独自の器形に独自の文様をつける創造性に重きを置いた最初の作家は富本憲吉(1886-1963)でした。彼が用いた「模様から模様をつくらず」の言葉は、のちに続く作家たち、とくに色絵の作家たちにとって大きな抛り所となり、それまでの伝統的な色絵作品がもつ制約された様式を乗り越えて独創的な表現を生み出していきました。

しかしその一方で、そうした作家たちの表現には、色絵作品が本来持っていた華やいだハレの場を飾る装飾性やユーモア溢れる遊び心も垣間見えてきます。染野コレクションを築いた染野義信(1918-2007)氏が、荒川豊藏(1894-1985)の色絵の作品に「堂々たる自己主張を通じて、見る者の心を吸い取る力を持った「ダイナミズム」を見つづ、一方で「見る者とともに遊ぼうとする」「ユーモア」というものを感じ取っています。近現代の色絵作品には、染野氏の言葉を借りれば、「アンビヴァレント」(両義的な要素がうかがえることも確かかもしれません)。

今回は、当館にご寄贈いただいた染野夫妻の陶芸コレクションから、そうした近現代の色絵作品を中心に展覧し、作家たちが切り開いた個性溢れる新しい表現の可能性とともに、その場を飾り、心遊ばせる華やぎのうつわたちの魅力をご紹介します。

